Institute for Studies in Humanities and Cultures, Nagoya City University

名古屋市立大学大学院人間文化研究科
人間文化研究所

NEWS LETTER

Vol.1, No.1　May 2005

〒467-8501　愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑１番地　Tel　052－872-3452　Fax　052－872-3536
Mail: institute@hum.nagoya-cu.ac.jp　HP: http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

はじめまして、人間文化研究所です。

人間文化研究所は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科の人文社会科学分野における総合的学際的特徴を生かし、人間、地域、共生に関する幅広い研究を行ない、もって学術の交流と地域･国際社会の発展に寄与することを目的として、2005年4月に設立されました。本研究所は「人間･地域･共生」をキーワードに、学際的共同研究を推進して参ります。

所長あいさつ　「就任にあたって」

名古屋市立大学人間文化研究所長　村 井 忠 政

このたび、新設の人間文化研究所の初代所長に選任され、2 年間の任期を務めさせていただくことになりました。この場を借りて、就任のご挨拶と若干の抱負を述べさせていただきたいとおもいます。

名古屋市立大学は医学部、薬学部、経済学部、看護短大からなる実学的色彩の濃い学部構成が長く続いてきましたが、市立二短大（市立女子短大、市立保育短大）と名古屋市立大学教養部の改組再編に伴い、新たに人文社会学部、芸術工学部、自然科学研究教育センターが設立され、その後それぞれの学部に大学院研究科（博士前期課程･後期課程）が設置され、看護学研究科博士後期課程を除くすべての研究科が完成年度を迎えました。これによって名古屋市立大学も、東京都立大学（首都大学東京）、大阪市立大学、横浜市立大学などと並ぶ公立の総合大学としての陣容が整い、今後の飛躍のための基盤がようやくできあがった感があります。

人間文化研究科は、人文社会学部の完成と同時に、人文社会諸科学の多様な専門領域にまたがる学際的な大学院として発足し、今日に至っています。昼夜開講制をとっていることもあり、働きながら専門的な研究をすることのできる東海地域の公立大学院として、いまや貴重な存在となっており、一般学生はもとより多くの社会人のニーズに応えております。毎年さまざまな社会経験(海外での国際援助活動､国内での実務経験や NPO 活動など)を積んだ個性的な社会人が入ってきて、一般学生に対してはいうまでもなく、教員にとってもよい意味での刺激を与えてくれる存在になっております。

大学院での研究教育の体制が一段落したところで、次なる目標として浮上したのが研究所の設置構想でした。しかしながら折悪しく、名古屋市財政の窮迫という事態に直面し、研究所の新設が危ぶまれましたが、名古屋市当局と学長をはじめとする大学首脳部の理解を得て、このたび念願の研究所設立にこぎつけることになりました。グローバリゼーションの進展のなかで、大学も地方自治体も転換期にある今日、名古屋市立大学もいま独立行政法人化に向けて大きな曲がり角にさしかかっており、教育研究の一層の充実と地域社会への貢献が私たちに与えられた緊急の課題となっております。

2004 年 12 月 18 日に、研究所設立に向けて本研究所を対外的に広くアピールするために、「共生研究の課題と展望」のテーマで公開シンポジウムを開催したところ、一般市民の方々の多くの参加をいただき盛況裡に終えることができました。なお、このシンポジウムの報告書はまもなく刊行される予定になっております。 東海地域の中核都市に立地する公立総合大学としての名古屋市立大学のなかにあって、人文社会科学系の多様な学問分野にまたがる教授スタッフを抱える本研究所には大きな期待が寄せられています。本研究所の活動の中核をなすのは、共同研究プロジェクトの推進とその成果の刊行でありますが、当面「人間･地域･共生」をキーワードに共同研究を推進していくことになりました。現在 5 つのプロジェクト･チームが研究活動を行っております。

共同研究プロジェクトの推進のほかに、研究所の活動としては、年報およびニューズレターの刊行(年 4 回)、国内外から講師を招いての講演会･研究会･シンポジウム等の開催､さらには国際共同研究の実施などが予定されています。また、今回ホームページを立ち上げたのを機に、広く学外の一般市民の皆様に積極的に情報を発信していきたいと考えております。いまだ発足したばかりの研究所ではありますが、研究所員をはじめとして研究科教員の皆様のご支援をいただくことによって、何とかこの研究所の活動を軌道に乗せていきたいと念願しております。ご支援､ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

人間文化研究所のホームページができました。 研究所に関する情報を随時更新いたしますので、ぜひご覧下さい。
http://www.hum.nagoya-cu.ac.jp/~institute

所長・所員紹介

所長：村井 忠政（むらい ただまさ）

名古屋市立大学大学院人間文化研究科（人文社会学部現代社会学科） 教授
専門分野：社会学、国際社会学
主な研究課題：アメリカ合衆国・カナダ・オーストラリアにおける移民政策・エスニシティ・多文化主義の研究、日系移民（カナダ・アメリカ合衆国）の生活史、日系人のエスニック・アイデンティティの研究、在日外国人労働者の受け入れと共生をめぐる問題
最近の主要業績：「自治体の外国籍住民施策―東海地域における多文化共生の現状と課題―」『財団法人名古屋国際センター設立 20 周年記念論文集』2005 年 2 月。

所員：山本 明代（やまもと あきよ）

名古屋市立大学大学院人間文化研究科（人文社会学部国際文化学科）助教授
専門分野：歴史学、アメリカと東欧の社会史、移民史
主な研究課題：アメリカ合衆国におけるハンガリー王国出身移民諸集団のアイデンティティと歴史認識、東欧のマイノリティ研究
最近の主要業績：「アメリカ合衆国東欧移民のアーカイブズ」『歴史学研究』789 号、2004 年 6 月号。
所員就任にあたっての抱負：多様な学問分野と地域をフィールドとする研究者が連携し、グローバルでかつローカルな視点をあわせ持つ研究を発信する拠点作りをしていきたいと思います。

所員：成 玖美（そん くみ）

名古屋市立大学大学院人間文化研究科（人文社会学部人間科学科） 助教授
専門分野：教育学、社会教育学
主な研究課題：現代日本における地域多文化教育研究、近代アメリカ合衆国における黒人成人教育史研究、戦後在日韓国・朝鮮人の生涯学習実践史研究
最近の主要業績：「タスキーギ学院におけるエクステンション活動」『人間文化研究』第 3 号、2005 年 1 月。
所員就任にあたっての抱負：学際的な研究科の強みを活かした独創的な共同研究が推進できるよう、研究交流と情報発信に努めます。

共同研究プロジェクト発進！！

研究所共同研究プロジェクトが発進しました。共同研究プロジェクトとは、本研究所の目的を実現するために、本研究科教員を中心として構成される研究グループによって推進される共同研究活動です。

今年度は以下の 5 つのプロジェクトが取り組まれます。以下に概要をご紹介いたします。

□ テーマ：名古屋市と東海 3 県における多文化共生の現状と課題：自治体の外国籍住民施策を中心に

研究代表者：村井忠政（人間文化研究科教授）
研究分担者：山田明（同研究科教授）、成玖美（同研究科助教授）、米勢治子（人間文化研究所特別研究員）
研究概要：東海地域における外国人労働者の急増は、地域社会にさまざまな波紋を投じている。本研究は外国籍住民と日本人住民とが共に地域社会の一員として参加する環境づくりに向け、自治体の外国籍住民施策の実態と問題点を明らかにすることを目的とする。9 月 17 日（土）には「外国籍住民との多文化共生（仮）」をテーマに、ベフ・ハルミ氏（スタンフォード大学名誉教授）を招いてシンポジウムを開催する。また東海地域の自治体施策に関する報告書や統計資料などを収集し、担当者からの聞き取りもおこなう。（名古屋市立大学特別研究奨励費採択）

□ テーマ：越境する文学の総合的研究

研究代表者：土屋勝彦（人間文化研究科教授）
研究分担者：田中敬子（同研究科教授）、沼野充義（東京大学大学院人文社会系研究科教授）、
谷口幸代（同研究科助教授）、山本明代（同研究科助教授）
研究概要：英語圏、独仏語圏、ロシア・東欧語圏、日本語圏における過去および現在の越境作家たちの歴史的文化的な役割とその方向性を考察し、その文化的営為の諸相と意義を明らかにすることを目的とする。今年度は、日本語圏における越

境作家たちのシンポジウムを開催する。多和田葉子氏、リービ英雄氏、ゾペティ氏、水村美苗氏がパネラー候補者であるが、場合によっては、島田雅彦氏、堀江敏幸氏、松浦寿輝氏らを招待する。沼野充義氏の講演会も行う予定である。また国内外で越境文学関係の資料収集と整理を行う。(科学研究費補助金基盤研究(B)採択)

□ テーマ:障害をもつ子どもの成長・発達と生活を考える

研究代表者:滝村雅人(人間文化研究科教授)

研究分担者:穐丸武臣(同研究科教授)、野中壽子(同研究科助教授)

研究概要:軽度発達障害を有する子どもたちは、社会的規範や教育制度の要請に沿った行動がとれないことが多く、地域で他の子どもたちと一緒に活動しそこで得られる刺激や経験が乏しくなりがちである。そこで本研究は、軽度発達障害と診断されている学齢前の子どもを対象に、集団的活動における個々の行動を運動発達、生活動作の習得、対人行動等々の観点から分析することにより、地域で生活する障害児とその保護者のニーズに応えられるより効果的な支援方策を検討するものである。

□ テーマ:グローバル化と変貌する周縁

研究代表者:赤嶺淳(人間文化研究科助教授)

研究分担者:松本佐保(同研究科助教授)、佐野直子(同研究科助教授)、平田雅己(同研究科助教授)、山本明代(同研究科助教授)

研究概要:本研究では、さまざまな周縁世界にいきる人びとが変貌する動態を、周縁化されるにいたった歴史性をふまえつつ考察する。今年度は、以下の 2 つの研究をおこなう。1) かつて藤前干潟(名古屋市)を利用していた人びとのライフヒストリーを収集しつつ、当事者中心の藤前干潟の活用策を考える。2) 人間の安全保障の視点から、安全保障の問題性や地域統合における政治的・社会経済的問題を整理する。

□ テーマ:18才のハローファミリー:次世代育成支援のための若者へのメッセージの研究

研究代表者:石川洋明(人間文化研究科助教授)

研究分担者:安藤究(同研究科助教授)、山田美香(同研究科助教授)、久保田健市(同研究科助教授)

研究概要:現在、次世代育成支援は全国的な急務だが、家族をめぐる変化は激しく、旧来の家族観をそのまま伝えることが次世代育成支援に適切とも効果的とも思われない。そこで本研究では、家族形成に関して若い世代向けに発すべきメッセージを検討する。具体的には、家族生活でおこなわれる選択とそのシミュレーション結果を示し、家族形成の困難と魅力とを語りつつ、若い世代の意思決定を支援する「ガイドブック」の作成をめざす。

◆新刊本案内◆

(2005 年 1 月～2005 年 5 月)

・宮田学(人間文化研究科教授)・
Joseph Stavoy(人文社会学部外国人教師)著
『英語で書いてみよう -Can't Stop Writing』
三修社、2005 年 2 月、1700 円(税別)。

・朝倉美香(人間文化研究科助教授)著
『清末・民国期郷村における義務教育実施過程に関する研究』
風間書房、2005 年 2 月、14500 円(税別)。

・堀江孝司(人間文化研究科助教授)著
『現代政治と女性政策』
勁草書房、2005 年 2 月、4700 円(税別)。

・Martin Kubaczek und Masahiko Tsuchiya (Hrsg.): *Bevorzugt beobachtet. - Zum Japanbild in der zeitgenoessischen Literatur.*
IUDICIUM-Verlag, Muenchen, 2005 年 5 月.
(Masahiko Tsuchiya 土屋勝彦:人間文化研究科教授)

・ランジャナ・ムコパディヤーヤ
(人間文化研究科助教授)著
『日本の社会参加仏教－法音寺と立正佼成会の社会活動と社会倫理』
東信堂、2005 年 5 月、4762 円(税別)。

速報!

＊公開シンポジウム「共生」 報告書発行のお知らせ

2004 年 12 月 18 日(土)、名古屋市立大学人文社会学部棟にて開催されました公開シンポジウム「共生」の報告書が、6 月に発行されます。登壇された今福龍太氏(東京外国語大学大学院教授)、平野健一郎氏(早稲田大学教授)、宮島喬氏(立教大学教授)、水野里恵氏(愛知江南短期大学助教授)の各報告内容と、パネルディスカッション(全体討議)の記録を掲載しております。ご希望の方は、当研究所までお問い合わせ下さい。尚、部数に限りがありますのでご希望に添えない場合もございますことを、あらかじめご了承下さい。

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第１回 「 共同研究・馬齢・末繁昌 」　　服部 幸造 (人間文化研究科教授)

1971 年、大阪府立大学に赴任した。青春が終った 28 歳であった。奈良教育大学のA先生を中心にした研究会に参加した。國學院大學出身のF先生や、大阪大学を出た私と同世代の人たちがいた。その当時はあまり研究されていなかった幸若舞曲という中世の語り物の講読を中心としたものであった。出身大学も違い、従って研究方法も違い、それぞれの研究分野も多岐にわたる者たちが、毎月一度、奈良に、後には京都に集まっていた。79 年に福井大学に移ったが、研究会に参加し続け、雷鳥は私の愛車になった。この研究会で得た研究上の刺激や情報や知識は大きなものであった。A先生が亡くなられた後はF先生が中心になり、『幸若舞曲研究』という書物を十冊出そうという、とんでもない計画がもちあがった。そんな無茶なことをと思ったが、本屋の広告が出、出版助成金も出ることになり、79 年2月に 500 頁の第一巻が出た。数えてみたら、私の担当部分は 80 頁以上もあった。若さゆえの無謀であった。それ以来どういうわけかほぼ順調に本が出、最終の十巻が出たのは 98 年2月であった。私は 55 歳になっていた。この間 96 年には名古屋市立大学に移っている。そのうちに、全十巻もあると使いこなすのに不便であるし、ここまでやったのならついでに事典も欲しいし、索引付きの別巻を出そうと言い出した者があった。お前がやれというので引き受け、これだけは原稿が集まらないから見切り発車をというわけにもゆかず、仏と言われた私も鬼に変身し、やっとのことで 04 年6月に出版した。61 歳になっていた。

名古屋に来て、近辺のいくつかの大学の人たちと新たな研究会を作っている。名大や名市大の院生もいるが、何よりも彼らの成長に目を見張っている。私の退職にあわせて成果を本にする予定なのだが、一番原稿の進み具合が遅れているのが私なのである。

研究所 information

＊詳細は変更されることがあります。最新情報は人間文化研究所ホームページにてお知らせします。

① シンポジウム 「仏教思想と共生をめぐって」
日時：2005 年 7 月 2 日(土) 13：00〜17：30
会場：名古屋市立大学人文社会学部棟 2 階 203 教室
シンポジウム：
吉田一彦(名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)
「日本仏教と山―その二つの類型―」
ランジャナ・ムコパディヤーヤ (同研究科助教授) 「近代仏教と社会性について」
筒井正 (愛知県立惟信高校教諭) 「移民社会の形成と宗教の機能―アメリカ日系社会と日本仏教―」
主催：名古屋多文化共生研究会、名古屋市立大学人間文化研究所

② 国際シンポジウム「東アジアにおける次世代育成支援と幼児教育改革」
日時：2005 年 8 月 3 日 (水) 9：00〜18：00
8 月 4 日 (木) 9：00〜17：00
会場：名古屋市立大学人文社会学部棟 2 階 204 教室
講演者および報告者：丹羽孝 (名古屋市立大学大学院人間文化研究科教授)、金明順 (延世大学校副教授；韓国)、楊黄恵吟 (香港教育学院教授；香港)、翁麗芳 (国立台湾師範学院教授；台湾)、李基淑 (梨花女子大学校教授；韓国)
＊中国からの報告者については人選中。
主催：比較国際幼児教育研究会
後援：名古屋市立大学人間文化研究所

③ 共同研究プロジェクト「名古屋市と東海 3 県における多文化共生の現状と課題」企画シンポジウム 「外国籍住民との多文化共生」(仮)
日時：2005 年 9 月 17 日(土) 14：00〜17：30
会場：名古屋市立大学人文社会学部棟 2 階 201 教室
基調講演：Befu Harumi (スタンフォード大学名誉教授)
「グロ-バリゼーションと日本―多文化共生社会をめざして」
その他、交渉中。
主催：名古屋市立大学人間文化研究所
後援：名古屋多文化共生研究会

編集後記　今年 4 月、研究所の入口には、所名を刻んだ大きく立派なプレートが掲げられました。「看板倒れにならないように」と研究科長の飛ばす檄 (半分はシャレ) を受け、研究所は自らの実質を作り上げていく過程に踏み出したばかりです。研究所の今後にご期待下さい。 (S)

名古屋市立大学
人間文化研究所